

### III グループ主催研究会

## 古事記神話の幼年向け再話作品について——イナバノシロウサギ神話の場合——

原田 留美

### —はじめに—筆者にとっての古事記神話の幼年向け再話の研究<sup>(1)</sup>—

筆者の学生・院生時代の主たる研究テーマは、上代文学であつたが、同時に児童文学評論研究会<sup>(2)</sup>にも参加していた。就職後、保育者養成に携わるようになつた際、ごく自然に古事記神話の幼年向け再話について考えてみたいと思うようになつた。今から二十年近く前のことである。当時市販されていた、ヤマタノヲロチ退治神話を再話した絵本、幼年童話、紙芝居等を取り上げ、二つの論文をまとめたものの、『古事記』との異同の指摘で終わるという、甚だ未消化なものとなつてしまつた。<sup>(3)</sup>

二本の拙論を書きながら、当時、次の二つのことを感じていた。古事記神話の再話について考え方とするのなら、まず原典である『古事記』、あるいは古事記神話とはどのようなものであるのかについて、ある程度説明する必要がある、もしくはせめて、それに対する見通しが必要である。そして、古事記神話を幼い子どもたちが楽しむことの意義意味や、その際に必要な条件について整理せずに幼年向けの再話作品を扱うことはナンセンスである。

これらの課題は筆者の手に余るものであつたため、結局このテーマについて考え続けることが出来なかつた。

時を経てもう一度この問題について取り組んでみたいと考えるようになつたのは、二十三年全面実施の学習指導要領に「伝統的な言語文化」なる項目が加わり、小学校低学年向けテキストに古事記神話をリライト、すなわち再話した作品が載るという情報に触れたことがきっかけであつた。どのような再話作品が教科書に採用されるのか、また、原典である『古事記』がどのように受け止められるのかについて関心を抱いた。

改訂版学習指導要領の全面実施の前から、改訂後の学習内容を意識した授業に部分的に取り組むということが各地の小学校で行われたようで、その際に活用されることを前提とした教師向け参考書籍が、平成二十年の公示後に何点か刊行されていた。右記の関心に基づきそのうちのいくつかに目を通したが、いずれも具体的な授業展開の方法や例を提示することに主眼が置かれていた。実際に授業を行う小学校教員対象の参考書である以上、それは当然のことと思ふ一方で、原典である『古事記』そのものに対する関心が薄いこと、そこで教材として示されている再話作品の特徴等へ言及が少ないことに関して、釈然としない思いを抱いた。

またそれと前後して、教科書展示会に足を運び、小学校国語科教科書発行予定の五社のテキストに目を通した。それらのうち、再話作品を掲載していたのは四社であつたが、いずれの物語も、古事記神話の幼年向け再話作品、児童文学作品として質が高いという印象を強くもつた。それだけに、実際の教科書掲載作品に基づくものではないものの、教師向け参考書籍における教材「作品」やその原典に対する関心の薄さ（と筆者の目には映つた）が思い起こされ、実際の教育の場において、再話作品や古事記神話がどのように扱われるのか、気に掛かつたというのが率直なところであつた。

さらにその頃、西條勉が著書の中で、『古事記』は子どもには向かない、難しくて無理だということを述べている

のを目にした。<sup>(4)</sup>今となつてはその主旨を確かめるすべはないが、おそらくは、『古事記』をまるごと子どもに分かりやすくリライトすること、もしくは、古事記の編纂意図を正確に踏まえて子ども向けにリライトすることは極めて困難だ、といった意味合いではなかつたかと推測する。

しかし、現実として、『古事記』まるごとではないものの、絵本や幼年文学という形で、古事記神話の様々な再話作品は出版され続けている。二十三年全面実施の学習指導要領に準拠した小学校国語科教科書に掲載される作品の質も相当に高い。

古事記神話の幼年向け再話を巡り、様々な考え方や活動が存在している状況の中、中心読者である幼年期の子どもたちを意識して見た場合、すでにある幼年向け再話作品はどのように評価できるものなのか、今一度考察を試みたいと考えるに至つた。

## 二 教育領域における『古事記』等の神話の受け止められ方

『古事記』等の神話が小学校低学年国語科の教材に採用されることが知られた際、教育実践・教育学研究の立場から、さまざまな反応が見られた。例えば三輪民子は、学習指導要領の改定案の段階では「昔話や伝説」とされていた内容が告示では「昔話や神話・伝説」と「異例の修正が成されたという経緯」を踏まえて次のように述べている。<sup>(5)</sup>

『古事記』や『日本書紀』が近代日本における皇国史觀の中でいかに歪められ痩せ細つていったか、それが国民を戦争へと駆り立てる元凶となつたか、その歴史を知る者にとっては、教科書の「神話」復活は危惧するところである。しかし、日本神話は決して一つではなく、沖縄にも山深い村に伝わる神楽や祈祷にも様々な相貌を見

せてくれる。また、ギリシャ神話など世界にも目を向けることができるだろう。偏狭な「記紀神話」に閉じ込めることなく扱っていきたいものだ。

一方、宮津大蔵は、小学校国語科教科書の教材として日本の神話が採用されるに至ったことに関して、「平成十六年の文化審議会の答申の影響が大きいことが考えられる」と指摘した上で、その答申の文言の分析を通して神話が教材として選ばれた理由についてまとめている。例えば、答申の「国語は文化の基盤であり、中核である。国語は、長い歴史の中で形成されてきた我が国の文化の基盤を成すものであり、また、文化そのものもある。国語の中の一つ一つの言葉には、それを用いてきた我々の先人たちの悲しみ、痛み、喜びなどの情感や感動が集積されている。我々の先人たちが築き上げてきた伝統的な文化を理解・継承し新しい文化を創造・発展させるためにも国語は欠くことのできないものである。」という記述を引用し、ゆえに「[神話]生成の過程を考えれば、教材としての必要性を述べる上で説得力のある説明であると言える。」と述べている。また、同じく答申の「国際化が急速に進展する中では、個々人が母語としての国語への愛情と日本文化についての理解を持ち、日本人としての自覚や意識を確立することが必要である。その上で、各国の固有の文化についての理解とそれを尊重する態度が一層大切になる。このような意識や理解を持つために、国語は極めて重要な役割を担っている。」という記述を踏まえ、「[神話]が各民族の深層意識が表出・集約されたものであるという立場を取れば、国語科教材に取り入れる意義も明確になつてくるだろう。」とも述べてもいい。<sup>(6)</sup>

三輪と宮津は日本の神話、特に『古事記』や『日本書紀』の神話について、異なる受け止め方をしていると考えられるが、それぞれの受け止め方の根拠はいずれも、明瞭とは言いがたい。

三輪は、近代日本の皇国史観によつて記紀が「歪められ痩せ細つていった」と述べている。すなわち、本来の

『古事記』や『日本書紀』と近代日本の皇国史觀は単純につながるものではないとしているように読める。しかしそのすぐ後で「偏狭な「記紀神話」とも述べている。「偏狭な「記紀神話」と、皇国史觀、そして（本来の）『古事記』

『日本書紀』の関係は当該論文からは読み取れない。

宮津は、「神話」が各民族の深層意識が表出・集約されたものであるという立場を取れば」と述べているが、『古事記』『日本書紀』の成立事情を考えた場合、古事記神話や日本書紀神話をそのように単純に捉えて良いものか、疑問の余地がある。

『古事記』や『日本書紀』の神話を、古代日本列島において広く共有されていたいわゆる民族の神話とする見方は、「小学校学習指導要領解説国語編」（平成二十年。なお、同様の記述は平成二十九年のものもある。）にもうかがえる。該当箇所を引用する（「第3章 各学年の目標と内容」「第1節 第1学年及び第2学年」「[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]」）。

昔話や神話・伝承は、国の始まりや形成過程、人の生き方や自然などについての古代からの人々のものの見方や考え方が、長い歴史の中で口承だけでなく筆記された書物として、現在に引き継がれてきたものである。

「昔話」は、「むかしむかし、あるところに」などの言葉で語り始められる空想的な物語であり、特定または不特定の人物について描かれる。

「神話・伝承」は、一般的には特定の人や場所、自然、出来事などと結び付けられ、伝説的に語られている物語である。

これらをもとにした本や文章を活用して読み聞かせを聞いたり、発表し合つたりすることになる。神話・伝承に

については、古事記、日本書紀、風土記などに描かれたものや、地域に伝わる伝説などが教材として考えられる。

### 三 古事記神話は神話か

『古事記』、『日本書紀』の成立は一三〇〇年ほど前に遡る。後代のものはいえ複数の写本が現代にまで伝わっており、成立当時の姿をある程度知ることが出来る。遙か昔の作品に今も触れることが出来るという意味においては、「長い歴史の中で」「現在に引き継がれてきたもの」と言える。しかしそのことは、古事記神話や日本書紀神話などが、素朴な民族の神話であることを保証するものではない。二十年前同様、『古事記』あるいは古事記神話がどのようなものであるかについて、筆者自身は独自の考え方を提示することはできないままであるが、成立論をはじめとした多くの先行研究の成果がそのことを示している。『古事記』や『日本書紀』の編纂は、七世紀半ばから八世紀初めにかけての激動する東アジア情勢の中、国としての経営基盤を整える事業の一つとして行われたものであり、すなわちそれが政治的な意図に基づき編纂された書物であることは動かない。

そしてその『古事記』等の神話について、例えば益田勝実は次のように述べている<sup>(7)</sup>。

まず神があつて人間の歴史が始まつた、と原始・古代の人びとは考えてきたようだが、その神という存在を創出し、その神を巡る神話を創造したのは、人間の方だつた。神話は、そのかみの人びと想像力の所産で、それは幾次元もの位層の異なる創造が、歴史的に畳み重なつてゐる。日本人の創造し、伝承してきた神話を、単純に記紀に遡つてとらえられるとするのは、問題があらう。第一次的な血縁的地縁的共同体が維持していた神話に、より大きな幾層かの地方豪族支配圏の作り出した神話が重なり、それらの上に中央権力の編み出した神話がかぶ

さつている。

益田は、人びとが伝承した素朴な神話と地方豪族支配権が作り出した神話、中央権力が編み出した神話の重層性を『古事記』等の神話に見て取っている。

さらに、『古事記』が描く古代と『日本書紀』が描く古代は別物ということもわかつてきている。かつては、記紀神話という言い回しを研究と関わる言辞においてよく目にした。その中には、無自覚のうちに古事記神話と日本書紀神話を同質・類似のものとして扱っていたケースも少なくなかつたようだ。筆者も、記紀をそのように扱つたことがあつた。しかし、『古事記』と『日本書紀』は編纂意図を異にする別個の書物である。よつてそこに描かれている「古代」（西暦七〇〇年前後の人びとにとっての古代）は、それぞれの論理に依つて立つ別ものである。このあたりのことについては、神野志隆光が丁寧にまとめている。<sup>(8)</sup>

なお、『古事記』や『日本書紀』の編纂の際に用いられた資料には、外国の説話も含めたさまざまなもののが含まれており、多様性があることを松本直樹は指摘している<sup>(9)</sup>。

『古事記』、そして『日本書紀』も、非常に複雑な顔を持つ。どのような書物かを一言で言い表すことは極めて難しい。だからこそ魅力的でもある。単に古いものだから、あるいは国の起源や成り立ちを規定する絶対的なよりどころと見なして、存在意義を認めようとする姿勢には、無理があろう。同時に、遙か昔、一三〇〇年前の社会情勢や国際的状況を受けて成立したものであることにも留意する必要があると考える。そこにあるのは、近現代人にとっての歴史観とは別物の、古代人にとっての「古代」観、歴史観であることを忘れてはなるまい。仮に、近現代の歴史観に通底する要素を『古事記』や『日本書紀』に見出せるとするならば、それは享受史の問題として整理していくことが求め

られるものと考える。

#### 四 幼い子どもたちが神話に親しむことの意味

幼い子どもたちが神話に親しむことの意義についても、いまだに見通しをもつことが出来ないでいるが、その見通しつつながるのではないかと考えていて少しく述べたい。

幼児の遊びは、物で遊ぶことから始まり、そのうちに物に物語を付与する遊びに展開していく。拙著<sup>(10)</sup>の後書きでも紹介した例だが、ビー玉集めに興じていた四歳児が、オレンジ色のビー玉には太陽の力、青のビー玉には海の力、緑のビー玉には森の力が宿っているのでは、という保育者のつぶやきを捉えたことで、ファンタステイックなごっこ遊びに活動を展開させていった例などは、そのことをよく示していると考える。また、地図作りというモノ作り中心の遊びから、宝探しごっこに発展した事例にも触れたことがある。日常生活を素材にした遊びにも、その傾向を見て取ることが出来る。大型積み木等で家を作ったあと、その家に住む人びとになりきつておうちごっこが始まる。そのうちにいくつかのおうちごっこやお店さんごっこがつながることで、町のような舞台ができあがり、その中でそれぞれの役割を演じるごっこ遊びに展開していくなどのようすは、子どもたちの間ではしばしば見られる（なお、町作りごっこのような本格的な集団遊びが可能になるのは、年長になつてからである。）。

発達段階が上がって行くに従い、物遊びから物語遊び、物語を共有する遊びへと変化をしていくが、遊びの中に物語が取り込まれたときに、他者との交流が濃くなり始める。それらの遊びを通して人と関わる力の素地が育ち始めるのではないかと考える。

## 古事記神話の幼年向け再話作品について

物遊びから物語を取り入れた遊びへの発展が見られ始めるのは二～三歳頃ではないかと考えているが、本格的に物語絵本を楽しむようになつていくのもその時期である。幼児にとつてなじみやすい物語の特徴として、一定の型や繰り返し構造が挙げられるが、昔話の再話作品には、その特徴を備えたものがいろいろとある。遊びの中で他者とのつながりを作り出しありやすくする物語の供給源として、昔話や、あるいはその型を取り入れたオリジナル作品は、一定の役目を果たすのではないかと考える。

翻つて、神話はどうであるか。神話には、世界の成り立ちや秩序を語るという役割があり、単純な構造のものばかりではない。由来話は幼児にとつて理解が容易ではなく、その論理も含めてわかるようになるのは年長児になつてからと言われている。またそもそも、後で述べるように、特に古事記神話については、幼年期の子どもたちが親しむ際には再話上の配慮がいろいろと必要である。しかし、型や繰り返し構造を備えているものが多いという点では昔話と重なる。

幼い子どもたちが、物語に少しずつ慣れ親しみ、理解を深めていくという過程において、型をそなえた物語はそれなりの役割を果たしていくのではないかと思われる。神話も、そのような遊びの素材の一つとして有効なのではないか。

なお、現代文化批評・研究の分野において、大きな物語、小さな物語、ナラティヴ、物語の消費などの用語をよく目ににする。そこでは、ゲームや子ども向け商品のコンセプト、ライトノベルやアニメーションも考察の対象になつているが、このような研究の成果も、子どもと物語の関係（他者との関わり方や世界の認識の仕方に影響している可能性）を考える上で示唆に富むのではないかと考えるが、これは今後のこととしたい<sup>(1)</sup>。

## 五 古事記神話を幼年向けに再話する場合に配慮が必要な点について

すでに少し触れたが、古事記神話を幼年向けに再話する場合には、考慮すべき課題が五つほどある。ここではそれについてまとめておく。

### ① 現代語で書かれていない。

当然のことであるが、『古事記』は一二〇〇年前に成立した文献で、しかも子ども向けのものではない。子ども向けに分かり易い言葉で書き直す必要がある。

### ② 上巻全体を全て再話すると長い物語になる。

古事記神話は上巻に見られるが、これを全て再話すると、幼年期の子どもには長すぎる物語となる。この課題に對しては、いくつかの説話を選びそれぞれ再話して絵本化するという方法が採られることがある。シリーズ絵本として刊行するのである。<sup>(12)</sup>一方、有名な物語を単独で取り出し、再話した作品も出版されている。

シリーズ絵本にしろ、説話単独の再話にしろ、上巻まるごと再話するわけではないため、古事記上巻の物語の流れから切り離し再話することになる。そのことにより分かりづらくなるところが出てくることがある。この点についても対応や工夫が必要となる。

### ③ 各種制度や価値観が異なる社会の書物ゆえのわかりにくさが含まれる。

古事記成立時と現代とでは、社会・政治・経済の制度が大きく異なる。また、人生観や世界観をはじめとする様々な価値観も同じではない。そこからくるわかりにくさへの対応や工夫も不可欠となる。

④物語構造が複雑な話が含まれている。

幼い子ども達にとつてわかりやすい物語構造には、いくつかの特徴がある。「単純な繰り返し構造」「時間の流れが一方的」「登場人物があまり多くなく、出入りが少ない」「舞台が頻々とは変わらない」などである。しかし、後に述べるように、小学校国語科教科書に採用された「いなばのしろうさぎ」の物語は、これらの条件には当てはまらない。対象年齢によつては相応の工夫が必要になる。

⑤子どもにとつて親しみやすい人物造形、分かり易い人物設定になつてゐるとは限らない。

古事記の文章は簡潔であり、丁寧な描写はあまり多くない。また、③ともかかわるが、現代人の価値観や感覚とはズレがあるため、特に幼い子どもには理解しにくい人物関係も多々見られる。そのため、そのまま現代語訳しただけでは、人物関係がわかりにくかつたり親しみにくいものだつたりするところが出てくることがある。

右記のように、古事記神話を再話する場合には配慮すべき点がいくつもあるが、四社の小学校国語科教科書に採用されている稲羽の素戔神話を例に、具体的にどのようなところが問題となるのかについて、次に整理する（①については、ここでは取り上げない。）。

## 六 稲羽の素戔神話を再話する場合の課題について

稻羽の素戔神話は、オホアナムヂが地上世界（葦原の中つ国）の支配者大国主命になるまでの成長物語の冒頭のエピソードとして『古事記』に出てくる。オホアナムヂが支配者となるべき資質（医療知識）をもつ者であることを伝える話である（以後、大国主と呼ぶ）。

この物語は、お供として大国主を連れた八十神の、ヤカミヒメへの求婚の旅から始まる。そして、このエピソードの後、ヤカミヒメへの求婚に失敗した八十神による大国主への迫害の話が続く。稻羽の素菟神話のみを前後から切り離して再話する場合、大国主らが稻羽へと旅だった事情や、菟の救済の後のことをどの程度取り入れて（もしくは取り入れずに）話を完結させるかがまず課題になる。

次に、物語構造の複雑さへの対応を考える必要がある。この神話は、途中に菟の回想などが挟まるため、時間の流れが一定ではない。出来事を語られた順に箇条書きにして並べると次のようになる。

- iii 八十神が菟と出会い助言したこと、菟のダメージが大きくなる。
- iv 大国主が菟と出会い、菟からいきさつを聞く。
- i 菪が和邇をだまし、毛をむしられる。
- v 大国主の助言により、菟の傷が癒える。
- vii 菴が、菟神と言われるようになる。
- vi 菴が、ヤカミヒメは大国主を選ぶだろうとの予言をする。

右の各行の頭に付いているローマ数字は、出来事を、起きた順に沿って並べた場合の順番を示している。見ての通り、神話中で語られている順と、それらが起こった時系列の順序は合致していない。

さらに、稻羽の素菟神話は、舞台の移り変わりと登場人物の出入りも比較的激しい。舞台および登場人物は、次のように移り変わっている。

出雲（大国主と八十神）→ 稲羽の氣多の岬（八十神と菟ウ→ 大国主と菟）→ 隠岐の島（菟と和邇）→ 海上（菟と和邇）

稻羽の素菟神話は、時間の流れが一方的ではない上に舞台の移り変わりと登場人物の入れ替わりが激しい。そもそも、幼い子どもにとって分かり易い繰り返し構造になつていない。この神話は、幼年期の子どもにとって理解しやすい物語とは言い難い。

この課題に対応するため、いくつかの再話作品が採っている方法がある。それは、時系列順の物語展開にするといふものである。このようにすることにより、舞台の移り変わりも、「隱岐の島→海上→氣多の岬」とシンプルになる。

ただし、この方法を採ることにより、読み手にとっての登場人物の印象の強さに変化が生じる。稻羽の素菟神話の主人公は大国主であるが、右のように変えることにより、菟の行動に沿つて物語が展開していく印象が強くなる。菟により注目が集まりやすくなるのである。中心的な登場人物が大国主から菟に変わることになるのだが、菟の物語にすることで、大国主の成長の物語から切り離しやすくなる、つまり、単独の物語として扱い易くなるということも言える。

次に、様々や制度や価値観の違ひから来る理解のしにくさについて。稻羽の素菟神話の場合は、古代の社会制度等についての知識が無いと理解しにくいという点はあまり見当たらぬ。しかし、大国主が地上世界の支配者になり得た理由の一つを伝える話と捉えた場合には、幼い子ども読者への配慮が必要となるところが出てくる。『古事記』の最近のテキストの多くは、大国主は医療の知識を備えていたが八十神はそうではなかつたから、との解釈が主流となつてゐる。『古事記』には、優しい大国主と意地悪な八十神という明確な対比を示す記述は見られないのである。

けれども、医療知識の有無を支配者たる要件とする要素をそのままの形で再話作品に盛り込んで、幼い子どもに

#### 古事記神話の幼年向け再話作品について

は伝わりにくいことだろう。多くの再話作品では、大国主と八十神の対比を、医療知識の有無ではなく、優しさや思いやりを備えているか否かというかたちで示している。心根の良くない者が敗者となり、心根の良い者が勝者となるというパターンは、昔話によくある、隣の爺型と共通する。医療知識云々というよりも、幼い子どもたちには分かり易い設定と言えよう。

なお、意地悪な八十神と優しい大国主の対比は、求婚の要素の有無や主人公が誰か等にかかわらず、多くの再話作品に見える設定である。子どものみならず大人にとっても腑に落ちる設定ゆえ選ばれてきたということも考えられる。

最後に、子どもにとつて親しみやすい人物造形、分かり易い人物設定にする等の配慮が必要な点について。右に述べた、大国主と八十神の性格設定の対照性もこの一つにあたるが、菟の人物像にも配慮が必要である。菟の災難は自業自得的な面もあるが、和邇をだます菟を腹黒に描きすぎると、大国主による救済の是非が問われかねない。菟が受けた報いと、そこからの救済が、ともに子ども読者にとって納得しやすいものであることが求められよう。再話作品を見渡してみると、そのための対応としての菟像の造型上の工夫には、次の二つが目に付く。一つは、悪気のない人物として描くこと。もう一つは、反省する姿を示すことである。

ただし、このうちの後者、反省の要素を強く打ち出すと、教訓的な物語に見える可能性が出てくる。昔話には、他者をだますなどした登場人物が報いを受ける話、すなわち教訓的な話が多く、幼い子どもたちにとつても分かり易いものと言えよう。しかし、『古事記』の稻羽の素菟神話の主眼は、支配者としての大國主の資質の高さを示すことにがあるのであって、菟を通してなにかの教訓を伝えることにあるわけではない。教訓性を強く打ち出す場合、再話した物語世界の雰囲気が、稻羽の素菟神話とは異なるものになることは避けられない。

## 七 各再話作品の特徴について

これまでまとめてきたことを踏まえ、各再話作品の特徴について簡単に述べておきたい。取り上げるのは、現行教科書掲載作品、および、二〇一八年時点で一般に市販されている幼年向けの書籍のうち、稲羽の素戔神話を単独で再話している作品である。<sup>(13)</sup>

### (1) なかがわ光村版

この作品の主人公はオオクニヌシであり、物語構造も稲羽の素戔神話に近いものとなっている。話の冒頭、求婚の旅であることが語られるが、求婚の結果は語られず、オオクニヌシの優秀さを伝えて物語は終わっている。争いを好み優しいオオクニヌシと権力欲に囚われた意地悪な兄さんたちの対比が明確かつ丁寧に示されている。

うさぎについては、腹黒さは薄く、自らの計略がうまくいきそうになつた際にはうれしくなつてつい「きみたち、だまされたね」と口を滑らすなど、うかつな印象が強い。わには、人が良く、だまされやすい人物となつてている。

登場人物全体を見渡すに、兄さんたちの人柄の悪さが相対的に目に付きやすい描き方になつてていると言える。それは、結果として、オオクニヌシの穏やかな性格をクローズアップさせる効果をもたらしている。

なかがわ光村版の人物造形は、オオクニヌシの物語にふさわしいバランスのとれたものになつてているといえるだろう。

(2) かわむら東京書籍版

この作品の主人公も、おおくにぬしのみことである。そして、稲羽の素戔神話に近い物語構造となつてゐる。物語は、おおくにぬしのみことに大勢の兄神がいたこと、そして求婚のための旅立ちの言及から始まつており、おおくにぬしのみことが支配者となつたこと、その資質が高いものであつたことを述べて話が終わつてゐる。教科書掲載作品では唯一、うさぎの予言についての記述もある。

おおくにぬしのみこととあに神の対照性については、それが分かる記述はあるものの、人物像や心理を丁寧に描くという傾向は薄い。かわむら東京書籍版は、全般的に人物像や心情に筆をさいておらず、さめについての心情や性格描写もほとんどない。例外はうさぎで、その慢心については丁寧に伝えている。慢心が印象に残るような描き方になつてることにより、報いの大きさが当然視されやすくなるが、それは、大きな報いを受けたうさぎを救済したおおくにぬしのみことがより強く印象づけられることにつながっている。そしてさらにこのことは、救済への返報としてのうさぎの予言へと展開している。

この作品のうさぎとおおくにぬしのみことの関係は、愚かなうさぎとそれを助ける優しくて賢いおおくにぬしのみことというものにとどまつていない。かわむら東京書籍版もおおくにぬしのみことの物語であるが、なかがわ光村版と比べるとうさぎのウェイトが大きいと言える。

(3) ふくなが教育出版版

この再話作品の物語構造も稻羽の素戔神話に近いが、冒頭には、求婚の要素のみならず、おおくにぬしについての

言及もない。八十人の兄弟が、うさぎの前から立ち去った後におおくにぬしが登場してきている。また、おおくにぬしと兄弟神の人柄が対照的であることへの具体的言及は、それなりにあるものの多くなく、それぞれの人物についての描写も比較的あつさりしたものになつていて。このことにより、おおくにぬしや兄弟神の印象が軽くなっている。わにについても、冷静な人物造型となつていて、その描写は客観的である。

一方うさぎについては、腹黒さが強調されており、うかつさや未熟などの印象は薄い。そして、うさぎについては全般的に丁寧に描かれていて、うさぎの印象が相対的に強く残る。最後も、うさぎの傷が癒えたところで終わつており、「——これが、いなばのしろうさぎです。」の一文をもつて物語が閉じられている。物語構造は稻羽の素戔神話に近いが、この作品の主人公は、うさぎと言える。

なお、本作品の原作は『おおくにぬしのぼうけん』（福永武彦・文、片岡球子・絵 岩崎書店 一九六八年）である。原作では主人公はおおくにぬしであるが、本エピソードの切り取り方を工夫するなどのことにより、主人公がうさぎに見えるようになつていて。

#### （4）みやかわ三省堂版

教科書掲載作品の中では唯一、時系列順の物語展開となつていて。また、冒頭には求婚の要素はないほか、オオクニヌシノミコトについての記述はない。海を渡りたいウサギの物語として始まつておらず、傷が癒えたウサギが、去つて行くオオクニヌシノミコトを見送るところで物語が終了しており、ウサギが主人公になつていて。

おおぜいのかみさまたちとオオクニヌシノミコトの関係は不明で、性格の対照性についての言及はあるが、双方とも

描写に筆が費やされてはおらず、与える印象は薄い。

ウサギやサメの人物造型については、ともにやや子どもじみたところがあるものとなっている。特にウサギは幼く、サメとのトラブルは、ウサギの未熟さゆえの考えなしから引き起こされた出来事との印象を読者に与えるものとなっている。考え方なしのウサギがサメを利用としようとしてひどい目に遭うが、心優しいオオクニヌシノミコトに助けられる話、とまとめることができる。最終場面では、ウサギがオオクニヌシノミコトに頭を下げているが、教訓めいた文言はない。この作品のみ、一年生の教科書に採用されている。時系列順の物語展開になっている、すなわち、より幼い子どもにも分かり易い再話になっているのは、対象学年への配慮であろう。

### (5) いもと版

この再話もみやかわ三省堂版同様、時系列順の物語展開になっている。冒頭に求婚のエピソードはなく、おおくにぬしのみことについての言及もない。海を渡りたいうさぎの物語として始まっている。

おおくにぬしのみことといじわるなかみさまの対照性については、分かり易く示されているが、細やかな心情描写や性格についての記述は多くない。うさぎは浅はかで未熟、さめは陽気な性格である。

おおくにぬしのみことに助けられた後、「うさぎは こころから はんせいしました。」で物語が完結しており、教訓性を強く出した形で再話されている。

## (6) 坪田版

この作品も、時系列順の物語展開になつていて、冒頭には、求婚のエピソードも、大国主についての言及もない。海を渡りたいうさぎの物語として始まっている。傷が癒えたうさぎが、反省するくだりも描かれているため、この作品にも教訓性を強く感じる。しかし、菟の反省をもつて物語が終わつていてわけではない。最後に、大国主が唐突に求婚のことをうさぎに話し、うさぎは、大国主が選ばれるであろうとの予言をしている。さらに、予言のとおりになつたこともふれられている。そして「めでたし めでたし」でしめくくられている。うさぎの物語として始まつていて、最終場面で焦点が当たつているのは大国主の方である。なお、大国主と大せいのかみさまの対照性については、わかりやすく示されている。

時系列順である点においては、いもと版、あるいはみやかわ三省堂版と共に通するところが見いだせるが、坪田版は独自性の強い再話作品となつていて、わにに数比べをもちかける前に、うさぎはたか・かめに、向こう岸に連れて行つてほしいとの交渉を行つていて、このオリジナル要素を加わることで、繰り返し構造になつていて、先に触れたように、この作品のしめくくりは「めでたし めでたし」だが、語り出しも「むかし」になつていて、繰り返し構造になつていることも併せて考へるに、昔話の形式をかなり強く意識していると言えるだろう。

その一方で、合理的に語ろうとする姿勢も見える。うさぎが渡海を望んだ理由（生活の厳しさ）が明示されており、たかやかめがうさぎの願いを拒否した理由の説明（距離があるため日数がかかる）も具体的である。うさぎがわにに提示した数比べの方法には、わにの考え方だけでなく、うさぎの数の考え方が含まれている。わにをだますための用心周到さを感じる。本作品のうさぎには、総じて幼さは認められない。一方、さめは、負けず嫌いな性格となつていて、

坪田版は独自性が強いが、語りの型が昔話等の説話的である一方、合理的、いわゆる児童文学的な説明が多い。型と語り方にそぐわないところがあると感じる。物語の始まりと終わりで焦点が当たっている登場人物にずれがあることも、すでに述べたとおりである。

### (7) 谷版

この作品も、時系列順の物語展開だが、独自色が強い。物語は、因幡の国に住むウサギが洪水で流されたところから始まっている。筏を作り、島に流れ着くことで命ながらえたうさぎが、海を渡り元の住処に戻ろうとして、サメを利用するのである。この始まり方は、『塵袋』の「因幡ノ記」に見える話に近い<sup>(14)</sup>。

ウサギは知恵ある存在として描かれており、サメは、陽気で負けず嫌いな性格となっている。ウサギが苦しむ場面に、わかいかみさまたち、そしてオオクニヌシノミコトが順に登場しており、わかいかみさまたちとオオクニヌシノミコトの対照性についても示されている。ただし、わかいかみさまたちに関しては、悪辣な印象は比較的薄い。そして、オオクニヌシノミコトは、ただ優しいだけの人物ではなく、他者をだますようなことをすると報いがあること、しかし、報いを十分に受けた後には許されることを告げている。ウサギよりも一段上の次元から、世の中の道理を告げる存在として位置づけられている点が、特徴的である。なお、求婚については触れられていない。

物語の始まりも独特だが、終わり方にも独自性が認められる。傷が癒えたウサギが、蒲の花粉の薬理効果を人々に伝え、死後に祀られたとして終わっている。『古事記』に見える「菟神」を想起させる終わり方であるが、あるいは、いなばのしろうさぎゆかりの神社を意識しての結末なのかもしれない。いずれにしろ、薬と神社の由来話になっている

点が、昔話的である。一貫してうさぎの物語であり続けていると言える。

『古事記』以外の伝承も踏まえているとみられる谷版は、独自色が強く、オリジナル作品に近いが、うさぎの物語として無理なくまとまつてもいる。

## 八 おわりに

以上、小学校国語科教科書に掲載されている稻羽の素戔神話再話作品と、絵本等の形で現在市販されている同神話再話作品について簡単に見た。ごく簡単にまとめるのなら、教科書掲載作品はいずれも、『古事記』の神話を踏まえることを強く意識しているといえよう。対して絵本等の再話作品は、オリジナルな要素を付加しているものが多い。より自由な発想で再話されていると言えるだろう。

幼年向けに古事記神話を再話する場合、想定する子ども読者の発達段階や、教育・保育のねらいの捉え方によつて、再話の方向性や個性が変わってくる。同じ神話であつても様々な再話作品が生み出されうるということである。そしてこのことは、子どもたちが多様な再話作品と出会え、選べることにつながる。そのような状況は、子どもの読書環境として望ましいと考える。

筆者は、教科書掲載作品も絵本等の作品も、ひとしなみに文学作品として扱つて研究している。教科書掲載作品は教材であり、文学作品としての扱いが教材研究に資するものか疑問を呈する向きもあることだろう。最後に、この点について触れておきたい。

いう手法で達成が可能である」と指摘した上で、そのような活動においては、「教師の読み聞かせの質が問題になつてくる」と述べる。教師が「事前に十分な練習を行い神話のおもしろさを伝えようと熱意を込めて読み聞かせを行つた」場合には、子どもたちは神話を楽しむことができており、教師の読み聞かせが十分でない場合には「子どもたちがあまり感想を述べない」ことを、実践研究の結果として指摘している。<sup>(15)</sup>

この指摘は、教師と教材作品の関係を考える上で、極めて示唆的である。「神話のおもしろさ」を子どもに伝えるためには、まず、教師がその神話の面白さを理解していなければならない。神話の再話作品が文学作品であることを考えるのなら、神話の面白さは文学的面白さを当然含むものと捉えられよう。

古事記神話の再話作品の、文学作品としての面白さをまず教師自身が知ることは、豊かな授業展開につながると考えるものである。

## 註

- (1) 幼年、あるいは幼年期という言葉は学術用語としては熟していないところがある。しかし、就学前後の、絵本を楽しむ時期を抜け出つつある子どもが楽しむ、ある程度の長さのある読み物・物語を幼年文学という語で示すことがある。この言葉を援用し、五歳～七・八歳くらいの子どもを指す言葉として、幼年、あるいは幼年期を使っていくこととする。
- (2) 日本児童文学者協会の会員が中心となつて運営している自主的な研究会の一つ。
- (3) 「神話と児童文学・スサノヲのヤマタノヲチ退治神話について」『精華女子短期大学紀要』二五 一九九九年三月

「神話と児童文学（その2）続・スサノヲのヤマタノヲロチ退治神話について」『精華女子短期大学紀要』二六

一〇〇〇年三月

(4) 西條勉『古事記』神話の謎を解く——かくされた裏面——「はじめに」iv頁 中央公論社 二〇一一年

(5) 三輪民子「新小学校国語教科書にみられる「伝統的な言語文化」「子どもの本棚」四十巻三号 二〇一一年三月

(6) 宮津大蔵「神話」を教材とした小学校国語科授業に関する「考察」『教材学研究』二十二 二〇一一年

(7) 益田勝実「神話的想像とその後」『日本児童文学』一九九〇年二月号

(8) 神野志隆光『複数の「古代」』講談社 二〇〇七年

(9) 松本直樹『神話で読みとく古代日本——古事記・日本書紀・風土記』筑摩書房 二〇一六年

(10) 松本直樹「神話教材の可能性を考える——神話研究者の立場から」『早稲田大学国語教育研究』二二 二〇〇一年三月  
『古事記神話の幼年向け再話の研究』おうふう 二〇一七年

(11) 例え、大塚英志や東浩紀の著作など。

(12) 例え、「日本の神話」シリーズ（あかね書房 一九九五年）トモ出版から出ていたものの再版)、「日本の神話 古事記えほん」シリーズ（小学館 二〇一六年）など。

(13) 取り上げる作品は次の通り。教科書はいずれも平成二七年度版による。

なかがわりえこ「いなばの白うさぎ」「こくご 二上 たんぽぽ」収載 光村図書（文中ではなかがわ光村版と呼ぶ。）  
かわむらたかし「いなばの 白うさぎ」『新編 新しい国語 二上』収載 東京書籍（文中ではかわむら東京書籍版と呼ぶ。）

ふくながたけひこ「いなばのしろうさぎ」「ひろがることば 小学国語2下」収載 教育出版（文中ではふくなが教育出版版と呼ぶ。）

みやかわひろ「いなばの白ウサギ」「じょうがくせいのこくご 一年下」収載 三省堂書店（文中ではみやかわ三省堂版と呼ぶ。）

いもとようこ 文・絵『いなばのしろうさぎ』金の星社 二〇一〇年

坪田譲治 文・井江栄 絵「いなばのしろうさぎ」『10分で読める物語 一年生』所収 学研マーケティング

一〇一〇年（初出 坪田譲治 文・福田庄助 絵『いなばのしろうさぎ』国土社 一九八〇年）

谷真介 文・赤坂三好 絵『いなばの白ウサギ』俊成出版社 二〇〇六年

（14）十三世紀頃にみられる百科事典様の書籍。

（15）註6に同じ。

※本稿は、古事記学研究会（一〇一八年三月五日 於國學院大學たまプラーザキャンパス）にて発表した内容を整理、まとめ直したものである。発表時には、多くの方々から示唆に富む貴重なご助言を多くいただいた。改めて感謝申し上げる。なお、本発表は拙著『古事記神話の幼年向け再話の研究』（とうふう 一〇一七年）の内容に基づいたものであることを申し添えさせていただく。